バトル学園物語

猫小判

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バトル学園物語

【Ｎコード】
Ｎ１４４０Ｃ

【作者名】
猫小判

【あらすじ】
その学園では力こそが全てだった。戦闘能力だけが生徒達の全てだった。何もかも力で決定される学園、総合武術高等専門学校『天上天下唯我独尊』。そこで生徒達は日夜戦闘に明け暮れ、互いに切磋琢磨していた……

（前書き）

バトルとかタイトルにありますが、これはあくまでコメディー（ところによりラブ）です。バトルは期待しないでください。

オレンジ色の光が差し込む放課後の生徒会室に人影が二つ。片方は生徒会長たる彼女、高崎楓。もう一人は同参謀である俺、下瀬大輔だ。

俺たちは無言。その沈黙は質量を持って俺達を苦しめる。

と、その静寂を粉砕するように、ばん、とドアが悲鳴を上げて開け放たれた。

「お姉様ぁ！　生徒会破りが現れたですぅ！！」

生徒会室に駆け込んできた少女が叫んだ。いま肩で息をしているその少女は三朝麻里亜(みささまりあ)、楓の信奉者だ。

俺は軽く片腕を上げる。

「よっ、麻里亜ちゃん。お疲れさん」

「うぜぇですぅ。私に話しかけていいのはお姉様だけですぅ。シネですぅ」

「声掛けただけでそこまで！？」

この娘がこういう奴だってのは分かってるが、なんつーかこの扱いは酷いと思う。

「で、麻里亜。所属と数は？」

「所属は天下、数は十人ですぅ」

楓に声を掛けられた麻里亜はとろけた顔で報告を述べた。

「ふむ。それなら楽勝だな」

楓は鷹揚に頷き、麻里亜の頭を撫でる。麻里亜は気持ち良さそうに喉を鳴らす。いつもの光景ではあるのだが、それが目に毒なのは相も変わらずだった。

楓は麻里亜の頭を撫でたまま俺の方に向き直る。

「さて、行こうか大輔。天下の馬鹿共を軽く捻ってやろうではない

か」
「……おう」
「……どうした？　不服なのか……？」
俺が気のない返事を返すと、楓は捨てられた子犬のような寂しげな表情を浮かべた。
……いや、不服とかそういう問題じゃなくて、
「ホラ、それが凄い顔して睨むからさ」
俺は睨むそいつを指差す。そいつは俺を親の敵でも見ているような目をしていた。
「ミトコンドリア未満の癖に私をそれ扱いですぅ？」
「やめろ、麻里亜。大輔はそこらの有象無象とは違う。わたしの、パ、パパ、パ、パートナーなんだから……」
「……お姉様がそうおっしゃるんだったら、控えますぅ。喜べ、この単細胞生物にも届かない半細胞生物が」
視線はいくらかマシになったが、口は酷くなった。なんて奴だ。
楓は苦笑いを浮かべてる。
「では行こう。我々の仕事をしに」
「おう。蹴散らしてやるか」
俺と楓は頷き合い、戦場へと赴くのだった。

俺達の母校、総合武術高等専門学校『天上天下唯我独尊』は些か、いや、めちゃくちゃ変わっている。つか名前からして変だ。
この学校は衰えていく古代、戦国、江戸武術を活性化させるために創立された学校で、生徒の実に九割が武術の道場に名を連ねる者達となっている。つまり、ここで武術の何たるかを学び、ライバルを見つけ、互いに高め合えということらしい。ちなみに××県の山中に所在し、全寮制だ。１２００人の生徒と１２０人の教員が在籍している。
で、何もかも変わっているこの学校で一際変わっているのが、生

徒会制度だ。この学校は四つのブロック、『天上』『天下』『唯我』『独尊』に分けられ、その一つ一つに生徒会組織が存在する。生徒会組織のトップは、ブロック内で好きなようにチームを組み、四月一日の生徒会役員選出大会によって決定する。つまり、生徒会役員団はブロック内で最強のチームとなる。また、生徒会はいつでも交代可能で、決闘によって生徒会を下すと代替わりが起こる。

ここで重要なことが一つ。この生徒会、最初こそブロック内から選出されるが、生徒会は必ずしも同ブロックの生徒がならなければならない訳ではない、ということだ。その上掛け持ち可。生徒会の権力は絶大であるため、生徒会を他ブロックに持っていかれるということは、被支配国となることと同義。

つまり、生徒達は自由と権力、そして名声を勝ち取るため日々鍛錬し、日夜闘いに明け暮れる訳だ。

色々言ったが、要するに『闘って勝ち取れ』っていうのがモットーだってことだ。それがこの学校の真理らしい。

麻里亜に誘導され、いつもの闘技会館に到着した。生徒会になったばかりの頃は俺も緊張したものだけど、今では緊張なんて微塵もない。むしろ自分の庭に帰ってきた気分だ。

楓もそれは同じようで、彼女は躊躇なく無造作に扉を開け放った。

その向こうには…………………………こてこてのドレスに身を包んだ奴がいた。いつものことだが、なんつーかツッコミにくいな。

ドレスの女は俺と楓をみとめ、

「ほーっほほほほっ！！　高崎楓、今日こそ『独尊』はわたくし、天道寺天音(あまね)が頂きますわよ！」

高笑いで出迎えた。

「なぁ楓」

「何？」

「帰っていいか？」
「駄目」
「つか、あいつ何回目？」
「十は下らないだろう」
「本当に駄目？」
「駄目」
俺は幸せを全て吐き出す勢いでため息をついた。

天道寺天音。
天道寺財閥の一人娘。
武道の経験が無いのにこの学校に入学した奇特者。その美貌と圧倒的カリスマ、戦闘の指揮能力で、自身の手を汚さずに生徒会長の座を勝ち取った、ある意味天才である。楓を終生のライバルだと思い込んでいる節があり、ことあるごとに楓に突っかかって来る、はた迷惑な奴だ。楓とセットで生徒会やってる俺の身も考えて欲しい。

俺は天音の後ろに控える戦闘員共に目を走らせる。いつもと同じ有象無象共。よくこんなんで生徒会になれたもんだといつも感心する。
「ま、いいや。もう始めようぜ。早く帰って寝たいんだ」
俺は拳を固めて腰だめに構える。いつもと同じような違う型。喧嘩屋の俺に決まった構えなんてありはしなかった。
俺に習って、楓は木刀を、向こうの有象無象共は各々の武器を構えた。
一触即発。そんな空気の中、一人だけ全く空気を読んでいない奴がいた。
「大輔さま、そんなご無体な……。わたくしは貴方と出会えるこの日をとても楽しみにしているのに……」
天音は口元を覆って、よよよといった風に泣き真似を………、
「ひぐっ……えぐ……」

いや、マジ泣きだ！　このお嬢さんマジで泣いてる！
　そして何だか向こうの有象無象の、女の子達の視線が非常に冷たい。何だか居たたまれなくなって、俺は隣に助けを求める。
「ちょっと楓。こういうとき俺は……」
「なんだ？」
「いや……なんでも、ない」
隣の味方である筈の楓の目まで冷たかった。ついでにちらりと見えた麻里亜はめちゃくちゃ愉快そうな表情をしていた。なんか俺、悪いことしたか……？
　と、唐突に天音は立ち上がる。目元をぐいとドレスの袖で拭ってぶつぶつと何事かを呟き出す。危ない表情だ。
「ふ、ふふ……。そう、大輔さまが冷たいのはそこの女が居るせいですわ……。わたくしがそこな女狐を下し、わたくしの方がより優れていることを示せばきっと……」
天音はキッと楓を睨む。
「高崎楓、許すまじ！　一、二、三番は大輔さまを足止めしなさい。残りは高崎楓を取り囲み、息を合わせて攻撃なさい。必殺ですわよ！」
『はいッ！』
完璧に息のあった、正に一糸乱れぬ動きで天音の手駒は動き出した。
「行くぞ、大輔」
「おうよ」
楓の簡単な一言に俺も簡単に頷き、俺たちは自分の相手へと向かっていった。

結果、戦闘はカップラーメンさえ作れない短時間で終了した。楽勝だった。数と戦術ではどうしようもない程に、俺達と天音の手駒達には絶望的な実力差があった。
天音は倒れている仲間達をぐるりと眺め、放心したようにぺたりと膝をつく。
「何故、何故こうもあっさりとやられるのです……」
楓は天音を見下ろし、厳然と言い放った。
「実力差だ。その面子ではわたし達に勝つことは出来ない。もっと人数を集めるか、強者を連れてくるのだな」
「くっ……！」
「では、さらばだ」
楓はくるりと踵を返す。
「さて、帰るぞ」
「お、おう」
有無を言わせぬその語調に、俺は戸惑いつつも楓の隣に並び、そのまま闘技会館の外へと足を向けた。
「まってくださいよぅ、お姉様ぁ～」
麻里亜の間延びした声が後ろから追ってくる。あれ、まだいたんだ。気付かんかった……。

「高崎楓、覚えておきなさい！　次こそは、次こそは貴女が地に這う番ですわ！！」
天音のえんさの叫び。しかし、俺達は構うことなくその場を後にした。

「おい、楓」
「どうした？」

「腕、見せてみろ」
「えっ？」
寮への帰り道。星がちらつき始めた空を眺めながら、俺は唐突に切り出した。あからさまに慌て出す楓。
「どどどうした、そんな藪から棒に」
「いいから見せろ」
「いっ、嫌だ！　何も無いのに殿方の前に肌を晒すなど……」
「そうですぅ。セクハラですぅ。この排水口に詰まった野菜の屑未満がぁ、ですぅ」
「あぁ～～！　セクハ……」
ここぞとばかりに便乗してくる麻里亜はこの際無視だ。俺はおもむろに、楓の右の二の腕を軽く掴んだ。
「痛っ……！」
「やっぱりな。さっき打たれたろ。ちょっと見せてみろ」
楓は観念したようにこくりと頷くと、おずおずと袖を捲り上げる。
楓が痛がったそこは、少し赤く腫れていた。
「良かった。これなら打撲ぐらいだな。今日は湿布でも貼って……、ってどうした？」
楓が俯いているのが気になってそれとなく表情を覗く。その瞳は潤んでいた。
「済まない……。わたしはあんな素人に毛が生えた程度の者達にも後れをとる、弱い人間らしい……。でも、お願いだ。背中を預けてくれなくてもいい。組んでくれなくてもいい。ただ、失望しないでくれ……。お前に期待されないのは、何よりも、辛い……」
血を吐くように語る楓。俺は楓の頭に手を乗せて、優しく撫でた。
「……大輔？」
「何そんなに思い詰めてんだよ。あの人数なら怪我して当たり前だ。ていうか、お前だから勝てたんだよ。それにな……」
俺は楓の瞳を真っ直ぐ見つめる。
「俺の背中を預けられるのはお前だけだ。これからもしっかりたの

むぜ、相棒」
「……！　ああ！」
楓は嬉しそうに微笑んで頷いた。と、俺は背後から、ドンと突き飛ばされた。それ程強くもなかったから何とか踏みとどまる。
「あぁ、もう！　二人とも何ラブラブしてるんですぅ！？」
俺を突き飛ばしたそいつは声を荒げて怒鳴った。……やべ、またこいつのこと忘れてた。
楓は顔を真っ赤に弁解する。
「い、いや、これはだな。パートナーとの意識確認でーー」
「お姉様とラブラブ出来るのは私だけですぅ！　本棚の裏側に溜まってる埃未満の大輔には勿体無いどころか、命が対価として必要ですぅ！　といわけで今すぐシネですぅ！！」
麻里亜はどこからともなくクナイを取り出し、俺の方に突き出す。
虚は突かれたが、脊髄反射の域、間一髪でかわすことに成功した。よくやった俺！
「危ねぇだろ！　それにラブラブなんてしてねぇ！　俺はもっと可愛らしいのが好みだッ！」
「問答無用ですぅ！」
次々と繰り出されるクナイを、時にかわし、時に叩き落として捌く。全てが必殺。一つでも通ったなら、死んだとも理解できずに死ぬだろう。
「楓ッ！　こいつに何とか言ってやってくれ！　つか助けて！」
「そうか……、大輔は可愛らしいのが好みなのか……。どうすれば可愛らしくなれるのだろうか……。いや、いっそのこと世界中の全ての可愛らしい女を殺して……ブツブツ……」
楓は地面を見つめて何事かをブツブツと呟いていた。その目はどこまでも危なかった。
「楓～～。楓さ～ん。タスケテ」
相変わらず麻里亜はクナイを繰り出し、楓はあっちの世界から帰ってこない。俺は麻里亜のクナイをかわし続け、楓の頭を心配しな

がら、
「今夜は飯抜きかな……」
そんなどうでもいいことを口にしていた。

（後書き）

今作、自分としては悪くなかったと思います。やっぱり、緩いコメディーの方が向いてるのかなぁ。

本当はもっと思想的なことを書きたいんですよね。テーマをしっかり決めて。

コメディーは楽しければいいのでテーマ性は弱めです。これって書いてるのは楽しいけど、書いた後空っぽなんですよね。こう読み取って欲しい、って読者に挑戦している部分が無いので、作品が一回しか楽しめない。

そう思ってテーマを固めて、世界観もそれで塗り固めて、それでていくつかの読み取りのバリエーションを目指した作品が何作かありますが（灰色とかクレイマンとか）、どうも下手くそなんですよねぇ。

歯痒い。自分の文章力の無さ、構成力の無さを突きつけられてるみたいで。

やっぱり本をあまり読まなかったのは人生の失敗です。中学時代にもっと本を読んどくんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1440c/

バトル学園物語

2010年12月4日04時20分発行